

ヨーロッパを訪ねて

海外留学僧第六回生 浅井宣亮

今年（平成三年）の一月から三月にかけてヨーロッパの禪道場を巡ってきました。初めてのヨーロッパで右も左もわからない上、言葉もほとんど話せません。どうなることかと不安を抱いて出発しましたが、どの国でも全く見ず知らずの私を暖かく迎えてくれました。

旅に出る前、特にパリの道場はプライドが高く、行っても冷たく応対されるというような噂を聞いていましたが、実際は大違いでした。このことをパリの道場の人に話すと、それは誤解

だということ、以下のように話してくれました。

「確かにプライドが高いというのは我々の欠点です。しかし多くの日本人は、教えてやるぞという態度か、何も言わずに笑っているだけです。寺の制度は日本では整っていますが、フランスでは白紙の状態から始まりました。修行僧が生活していくための収入を得ることも大きな問題でした。我々は僧になっても、外で働き収入を得なければ道場を維持していきません。だが

我々はこの環境の中で一生懸命努力し、修行しているのです。かつて私が日本の有名な僧堂を訪ねた時、その堂頭の最初の一言は『あなた達の修行は間違っています』でした。だから私は予定を変更してすぐにそこを引き上げました。日本人は、そんな時でも頭を下げるのを美德だと思うのですが、西欧ではそんなことはしません。我々は礼を尽さない人には礼を尽しません。」

ヨーロッパで最初に禅を広めたのは弟子丸老師だといわれています。その教えの基本となるものは、「正しい姿勢・正しい呼吸で坐禅をすれば正しい心をつくることができる」ということと、「日本の教え方はヨーロッパでは通用しない」という二つだと思えます。特にフランスでは、弟子丸老師が亡くなられた後もこの姿勢を堅持しています。それ故、日本との交流は現在ほとんどありません。私がパリの道場を最初に

訪ねた時、実はその道場は引越しており見つけることができませんでした。後でドイツで新しい住所がわかったので訪問することはできましたが、日本人は誰も引越したことをさえ知りませんでした。

あと意外だったのは、日本・ヨーロッパ間の交流と同じく、ヨーロッパ各国間の交流が全く活発でないということです。仲間ではあるが、同時にライバル・敵という意識も持っているからでしょう。だから私が道場を訪ねるとよく質問されたのは、他の道場の様子についてでした。この様なことはアメリカでも見られます。何故こうしたことが起こるのでしょうか。禅宗の特徴の一つに、特定の経典を持っていないということがあります。それ故、各道場がそれぞれの特長を出し易いという利点がありますが、一方では統一性に欠け易いという欠点にもなりません。各道場の指導者は、メンバーを集めるため



◀パリ・禅堂入口

▼パリ・新しい道場
(写真は弟子丸老師)



◀ミュンヘン(ドイツ)・禅堂内部



▲イタリア・禅堂内部

▼イタリア・本堂



に、メンバーが他の道場に移っていかない様に、自分のところの長所を強調するのが普通です。この道場で教える禅は「本物である」と言い切らなければ、人は集まってきません。しかしこれは、他は偽者であるという理屈を生み出し易いでしょう。だから近い道場ほど仲が悪くなるのでしよう。

「本物」の禅を修めようと努力することは尊いことだと思えます。しかしそれ以上に他人の立場を認めることは重要なことではないでしょう。各人はそれぞれ違ったバックグラウンドを持っています。釈尊はインド文化の中で、道元は日本文化の中で育った以上、全く同じ教えを説いたはずはありません。本質は同じかもしれないませんが、実際の布教の場では全く違ったスタイルになります。逆に、異なった社会で生きている場合は、異なった布教方法を採用して、初めて同じ本質の教えを説くことが可能になると言っ

た方が良いかもしれません。

日本の禅・アメリカの禅・ヨーロッパの禅はそれぞれ違った形を採るのが自然だと思えます。そしてどちらが上とか、どちらが本物かなどということは全く無意味だと思えます。誰もが一生懸命生きている以上、誰もが本物であつて、偽者など存在しないでしょう。

海外での一年を終えて、世界には多くの違った文化・常識を持つ人達が生活していることを知ることができました。現在交通手段の発達で世界は小さくなっていると言われますが、各国間の文化の相互理解は余り進んでいないと思えます。摩擦もこれから増加していくでしょうが、それを解決するのは、他人の立場を尊重すること以外にはないのではないのでしょうか。